

トピックス

珍しい魚の採集報告 がありました。

倉橋島地先で、

「シャチブリ」が獲れた！

倉橋島漁協から、「見たこともない変わった魚が獲れた」との情報が寄せられました。写真を送っていただくと、300 m くらいの深海にすむといわれる

シャチブリの仲間と分かりました（写真）。

漁協へ持ち込まれた底びき網業者の方の話では、これまでに全く見たことがないとのことで、瀬戸内海区水研によると、瀬戸内海では過去3例の報告しかないそうです。

温暖化の影響か、最近外洋性の魚の採捕報告が色々なところから寄せられます。

珍しい魚の採捕報告は、技術支援部までお知らせください。



倉橋島の小型底びき網で漁獲された
シャチブリ

挑戦してみませんか！ デジカメでアユの由来判別

河川等での内水面漁業では、漁業権の免許にあたって放流などの増殖行為が義務付けられています。アユでは、漁協が中間育成した人工種苗や海産・湖産などの種苗を放流していますが、どの種苗がよく釣れたとかが常に話題となります。昔から体高が高い・痩せているなどの体型で、天然遡上・湖産アユ・人工種苗を区別する人も多いのですが、体型は漁場のアユの密度と餌となるコケの状態の様々に変化します。そこで、試験研究機関などが調査するときには、アブラ鰭などを切って標識放流し、再捕時に区別していますが、標識していない場合は、そくせんじょうおうれつりんすう側線上横列鱗数（背鰭と側線の間の鱗の枚数、図1、以下「鱗数」）を数えて判別できることを東大海洋研が報告しており、当センターでも利用しています。鱗数は、湖産>海産>人工の順で少なくなります（背鰭前端部で計数した場合、湖産種苗：23～25、海産種苗：18～22、人工種苗：15～18枚）。ただし、背鰭の前側で多く、後側で少なくなるため、常に同じ位置から数える必要があり、最近では第3棘または第5棘から斜め下方に計数しています。

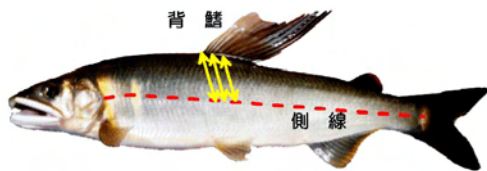


図 アユの由来を判別する鱗数の計数位置

漁期後半になるとアユも大きくなり、目をショボつかせる覚悟があれば数えられますが、7～10cmの稚魚の鱗を数えるには、実体顕微鏡などで拡大し、針などをあてて数えていました。そのため、慣れない人が数えるのは大変です。

最近の岩手県内水面水産技術センターの報告では、鱗をはがし薄めた墨汁で染めて実体顕微鏡で数えているとのことです。淡水魚支場時代に、「墨汁などで染めて数えやすくないか」などといろいろと努力した研究員もいましたが、

デジカメの普及前で、鱗をはがす方法には至りませんでした。

試みに、最も数が多いといわれる陸封アユ（椋梨川）を用い、計数する背鰭下部の鱗をはがし、デジタルカメラで接写してみると、意外とハッキリと写っています（写真）。デジカメ画像だといくら小さな種苗でも拡大して印刷すれば、実体顕微鏡や虫眼鏡で目をショボショボさせることもなく数えられそうです。また、画像を強調する処理を行えば、より鮮明にみることができます。鱗数も、種苗の生産場やその年の生育環境によって多少増減するため、放流した種苗の鱗数を記録しておくことで後で参考となります。また、隣接する漁協の放流魚とも区別できる可能性が高まります。

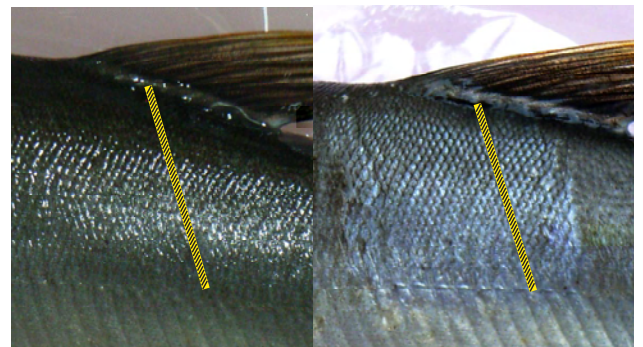


写真 陸封アユの鱗をはがす前とはがした状態
（沼田川支流椋梨川採取、白竜湖産）線は計数場所

なお、最近では、人工種苗に下アゴに分布する孔（下顎側線孔：天然魚は、概ね片側4孔）が少ないものが多いことから、これで区別している水試もあります。

デジカメで、種苗の由来を調べるには

1. 数える場所は常に一定にする。
2. 鱗をはがした部分は、水気をふき取る。
3. 数える場所がわかるように背鰭を立てる。
4. デジタルカメラは、接写モード（マクロモード）に設定し、明るい日陰で撮影。手ブレしないように三脚で固定する。
5. 種苗は、由来が同じでも鱗の枚数には幅があるので、20～30尾を数える。

（技術支援部 米 司 隆）